

ソコンが集まるようにし、Ganhati が、リユースパソコンの主産業になれることを最終目標としています。幸い Dr. Anirban Chaudhuri のところには、リユースできる技術者もいるようで、うまくいく可能性は高いと思っています。



ダーウィンスクールオブビジネスの教室

このような過程を繰り返して集まった情報に基づき、井筒さんや鹿毛社長に相談し、インドでの実現可能なビジネススタイルのイメージを膨らませていきたいと思っています。今後は、現地とは、メールや電話で連絡を取り合いながら、事業を進めていくことになります。しかしながら、どれだけ連絡を密にとっても実際に会って話を進めないとなかなかお互いに理解しづらいことがあることも事実です。それは言葉の問題があるとなおさらのことです。そこに、例えばインドに日本人の現地スタッフがいたら、ちょっとした潤滑油の役割を果たすことができるかもしれないと思いました。

それは、インドに行く前に、ダーウィンスクールオブビジネスが創っているNPOがインドのNPO団体として正式に認証されていない(認証されていないと日本からの助成金を受ける対象になりません) 事実が判明していたため、そのことを僕がダーウィンスクールオブビジネス側に説明をしたものの、なかなか理解をしてもらえませんでした。そこで、インドからスカイP(インターネットを活用した通話システム)を利用して、日本にいる鹿毛社長と連絡をとってアドバイスをもらい、その後アドバイスに基づいて、インドの日本大使館に電話して詳しい説明を聞き、そのことをダーウィンスクールオブビジネスのスタッフに話をすることで、理解をもらうことがで

きたことから、思いつきました。

日本人スタッフを現地に配置することができれば、もったいない運送で何か問題が発生した時も、互いの言語で具体的な問題点を相談することができますし、平日の仕事においても日本人スタッフがいて、日本とインドの協働事業を早く進めていくことができるでしょう。

■インドでの起業の決意

このように、インドと日本の架け橋的な存在として、インドに滞在する日本人スタッフの必要性を感じました。土日を活かしたもったいない運送の普及に始まり、事業として継続していくための平日の仕事、さらには運送業に限らず、日本とインドでの協働での様々なビジネスを実現可能にしていくためにもインドでの活動を頑張っていきます。

これらのことは、僕が有限会社鹿毛運輸に入社してから、ずっとやりたかったことです。国際協力の世界で食べていきたいと思い、コミュニティビジネスの世界を学び、広く世の中に貢献できる人間へと成長したいという想いで、これまでやってきました。僕の場合、ここでインドへ行かなければ、今までやってきたことの意味がありません。いろいろと調べなければならない詳細やインドで仕事をする中で様々な問題にも直面すると思いますが、気合いで乗り切ります!!



現地のスタッフと固い握手を交わす安武さん